
書 評・紹 介

尾嶋史章編著

『現代高校生の計量社会学 進路・生活・世代』

ミネルヴァ書房, 2001年, ix + 242pp.

近年、これからの社会を担う世代の「不可解」な行動がマスコミを賑わしている。青少年の凶悪犯罪や性行動の低年齢化、学級崩壊... そうしたなか「高校生」は、不可解な行動をする若者の代名詞のように扱われている。1990年代以降、こうした「不可解」な「高校生」はマスコミだけでなく社会学の分野でも少なからず取り上げられるようになったが、その一方で「ごく普通の」高校生たちの生活や意識の変化を計量的な方法によって明らかにしようという試みはそれほど多くなかったように思う。

本書では、こうした「ごく普通の」高校生（兵庫県南東部の高校13校の3年生）を対象に1981年と1997年に実施された2回の質問紙調査の結果が紹介されている。ここでの中心的なテーマは、高校生の進路選択意識であるが、本書が扱う進路選択意識は、必ずしも目前の進学・就職という意味決定に留まらない。具体的には、進路希望や職業希望、進学・就職動機といった高校生にとって比較的身近な意識から、ライフコース・イメージ（職業観、家庭生活観）のような長期的な展望まで幅広い意識を対象としている。本書では、こうした広い意味での高校生の進路選択意識をジェンダー意識、ナショナルリズム、相談ネットワークなどと関わらせながら、多角的に分析している。

本書の構成は、序章と終章を導入とまとめに配し、2部全9章から成る。第1部「現代高校生の進路選択と学校」では、第1章「進路選択はどのように変わったのか」（尾嶋史章）、第2章「学校生活と進路選択」（荒牧草平）、第3章「高校生にとっての職業希望」（荒牧草平）、第4章「ジェンダー意識の男女差とライフコース・イメージ」（吉川徹）の4つの論文が収められ、高校生の進路選択意識に関する中核的な議論がなされている。そのうえで第2部「現代高校生の生活構造と社会意識」では、第5章「職業観と学校生活感」（轟亮）、第6章「高校生の相談ネットワーク」（工藤保則）、第7章「高校生の抱くナショナルリズム」（金明秀）といった個別のテーマに基づく議論が展開されている。

1974年に高校進学率が9割を越え、事実上、ライフコース選択のスタートラインにある高校3年生が、自分の将来に対してどのような短期的・長期的展望を持っているのかということは、今後の家庭、労働市場を占む意味で大変興味深い。また2つの調査が実施された1981年と1997年という時代設定は、1985年の男女雇用機会均等法成立以前と以後に相当し、こうした労働市場における変化が高校生の進路選択意識にどのような影響を与えたのか（あるいは与えなかったのか）を問うことは、教育社会学の枠を越えて有用であろう。

最後に、本書で明らかにされたいくつかの知見を紹介しよう。本書のメインテーマである高校生の進路選択意識の動向は、1章において詳細に分析されている。主な結果について要約すると、卒業後の進路希望に関しては、全体として男子で変化が乏しいのに対して女子の変化が著しく、女子の間で進学理由の教養志向から職業・就業志向への転換がみられること、一方、職業希望では、男女ともに専門職志向の高まりが見られるが、その内容には男女差があり、女子の職業希望がいわゆる「適職」の枠から抜け出せていないことなどが指摘されている。また気になる点として、本書の随所で確認される高校生の将来に対する「判断保留」傾向（未定、分からない、どちらともいえないといった回答の増加）と性別役割意識における「浮動票」の存在（4章）を挙げておこう。ここではこれを、先行き不透明な社会状況のなかで人生をスタートさせなければならない彼らなりの予防線だとしているが、評者には、このような高校生の将来に対する「判断保留」傾向が、少子化の主な要因とされる晩婚化、晩産化の傾向とどこかで通じているような気がしてならない。

（赤地麻由子）